



エチオピア帝国再編と反乱（ワヤネ） ——農民による帝国支配への挑戦——

眞城 百華 著

横浜 春風社 2021 年 353+xix p.

本書が扱うのは、北東アフリカをめぐる緊迫した国際関係のなかで展開した民衆抵抗の歴史である。ティグライ語でワヤネと呼ばれるこの反乱は、5 年間のイタリア支配ののち、1941 年に再独立を果たしたエチオピア帝国政府が中央集権的な統治体制を確立しようとしていた矢先、1943 年に北部ティグライ州で発生した。同地ではイタリア支配下で旧来の支配階層である貴族と農民の関係が断絶された一方で、イタリアが無数の武器を残して撤退した直後の政治的な空白期間に治安が悪化していた。本書によれば、そうした状況下で農民は社会秩序の再建のために生活圏を越えた運動を組織し、地域の統治者であった世襲貴族の復権を求めて蜂起した。反乱に参加した農民は 2 万人にも及んだという。

しかし、共同体の権威を求める農民の要求は、統治体制を再編するために地方の行政改革を断行しようとしていた帝国政府の思惑と対立した。帝国政府はイギリスに軍事支援を要請し、イギリス空軍による空爆によって反乱は鎮圧された。イギリスは、第二次世界大戦中の国際秩序における北東アフリカの地政学的重要性から、エリトリアを軍政下におき、治安維持の名目でエチオピアでも全域に軍を展開していた。本書が提示する史料からは鎮圧を急ぐ帝国政府の焦燥感が伝わる。

本書の真骨頂は、反乱に参加した人々の証言を集めることで、先行研究では明らかにされていなかった農民の組織化や、政府によって隠蔽されてきた貴族の参加といった実態を明らかにしている点であろう。歴史上、鎮圧された反乱については、多くの場合、支配者による鎮圧の記録しか残されない。それに対して本書は、伝統的な会合を重ね、運動を組織した主体的な農民像を丹念に描き出し、政治に翻弄される客体という従来の農民像を刷新している。

当時のティグライ農民の運動は、反乱となり、政府による鎮圧の結果、直ちに自治や政治参加に繋がることはなかったが、後年の北部ティグライ州と中央政府のあいだにある緊張関係を考えるうえで常に想起されるほどのインパクトをもたらした。ティグライと中央政府は、本書で扱った帝政初期、その後の軍事政権期、そして 2020 年 11 月以降、三度戦火を交えている。その度に 1943 年の反乱に異なる意味合いが付与されることを本書は指摘している。本書は、現代エチオピアの国家が抱える集権化と地方の自立性の問題を浮き彫りにする一冊である。

網中 昭世（あみなか・あきよ／アジア経済研究所）

